

水鳥の鴨の羽色の春山のおほつかなくも思ほゆるかも

かきのいらつめ
笠郎女

『万葉集』巻八「春の相聞」の一首。水鳥である鴨の羽の色と同じように、緑がかって朧ろに霞む春の山のようにです。あなたの私への気持ちがおつとしてはつきりとせず、心もとなく思われてなりません。

笠郎女の歌は万葉集のなかに二十九首収められているが、そのすべてがたった一人の相手、大伴家持へ贈られた恋の歌である。全作品を並べると、恋の始まりから終わりへ、切なく悩み、苦しむ女性の心理の物語がモノローグのように展開されてゆく。なぜモノローグか。それは家持が彼女に贈ったのはたったの二首であったから。しかもその二首とも別れたあとのものだった。実際はもう少し数があったのかも知れないが、もしそうだったとしてもバランスの取れた恋愛ではなく、一方的に彼女が恋い慕う関係であったことが伺える。



掲出歌はまだ二人の関係が初期の頃と想定される。雄の真鴨は首や羽のあたりに艶のある深い緑色を帯びて複雑な色彩をしているが、それと若枝の緑混じりの春を迎えた山の色彩を重ねた独創的な比喩が鮮しい。しかもそんな春山のように青みがかって霞んだあなたのおほつかない気持ちである、とさらに比喩を重ねてイメージと心理の渦へ読む者を巻き込んでゆく。相手の気持ちを信じたい新芽のような若やかな心と、手ごたえのない相手への漠然とした不安の霞と。相反する思いに引き裂かれる不全感をわかつてほしい、という切ない訴えが、春山に深々と包まれる。

自分を思ってくれない相手を思うことの苦しみや逃避、絶望と諦め。恋の終わりへ向かって、笠郎女の歌の情念は濃度を増し、凄まじい迫力をもって哀しく加速してゆく。おそらく家持にとって彼女は青春期を過ごした女性の一人を入れた。女性として彼女を愛することはなかったけれど、彼女の歌はきつと愛していたのだろうと思う。

(小島なお)